

がんの教室

田中 伸哉

②1

免疫とは、体内に侵入したウイルスや細菌などの異物を排除する仕組みだ。免疫学は18世紀のイギリスで、エドワード・ジェンナーが天然痘の予防法を発見したことに起源がある。

インフルエンザやはしかの予防では、毒性を持たない病原体の断片、つまりワクチンを人体に注射し、免疫細胞に病原体を覚えさせる。すると毒性の強い本物の病原体が体内に入ってきた時に攻撃してくれる。警察官が指名手配犯を探して逮捕するようなものだ。

一般的に言うがんの免疫療法（がんワクチンとも言う）とは、予防法で

免疫療法とは

特定のタンパク質を攻撃

はなく、発症後に免疫力を強化して治療する。

手術や抗がん剤、放射線で治療したが、再発してしまったケースなどで使うことが多い。札幌大の知人医師によると、進化した脾臓がんの男性に免疫療法を試みたところ、3年経過し再発していないという。

免疫細胞は、がん細胞が持つタンパク質を目印に攻撃する。最近の手法は、この性質を利用したものだ。患者の体に、がんが持つタンパク質と同じものを注入する。すると免疫細胞は危機感を高め、自ら増殖して免疫力を高めるのだ。指名手配

犯の顔写真を全国に配布し、市民の「警察力」を借りるイメージだ。

がんの免疫療法は、ほかにもさまざまな方法がある。科学的に実証されたものもあれば、中には根拠に乏しいものもあるので注意が必要だ。多くは保険に適用されておらず、非常に高額になることもある。

患者にとっては「最後の頼み」で治療を選択するケースもあるだろう。主治医や病院の相談窓口に相談したり、セカンドオピニオンを受けるなどしてほしい。

（北大医学部腫瘍病理学教授）

